

2013.01.01  
No.373

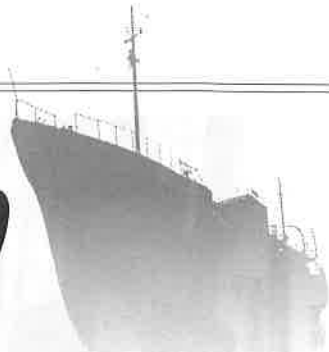
(1・2月号)

発行：公益財団法人 第五福竜丸平和協会

連絡所：東京都江東区夢の島2-1-1 〒136-0081 第五福竜丸展示館内

Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail : fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org

# 福竜丸だより



丸い船底の一部に設けられたメッセージボードには、子供たちの声がたくさん記されている。



## 核・被ばくなき世界への希望をつむぐ

公益財団法人第五福竜丸平和協会

代表理事 川崎昭一郎

明けましておめでとうござ  
います。皆様のご健勝ご発展  
を心よりお祈り申し上げます。

明年、第五福竜丸ビキニ被  
災事件六〇周年を迎えます。  
核兵器廃絶を目指す国民各層

の持続的な運動、毎週金曜夜  
の首相官邸周辺での原発再稼  
働反対を訴えるデモ、福島事

故の国際原子力機関IAEA  
での取り上げなど、昨年は原  
子力・放射能問題がクローズ

アップされました。この問題  
は引き続き本年のテーマとな  
るでしょう。

平和を願う国民にとってや  
や憂慮される動きが政界の一  
部に見られますが、私たちが

長年の努力で築いてきた核の  
ない世界へ向けての足場をし  
っかりと固め、更に一歩前に

踏み出すことが今日重要であ  
ると考えます。

ヒロシマ・ナガサキの真実  
を語れる人が少なくなる今  
日、第五福竜丸という実物の

存在は貴重であり、何よりも  
雄弁に語ってくれます。

第五福竜丸展示館への通  
算来館者数は本年一月には  
五百万人に達しようとしてい  
ます。

福島原発の事故により放射  
能への関心が全国的に高まっ  
ているいま、第五福竜丸展示  
館への訪問者を大きく広げて  
いきたいと思えます。

当展示館では大小を問わず  
来館者の全てのグループに対  
してボランティアの会が説明  
を実施しています。音声ガイ  
ドなどと違い来館者一人ひと  
りと対面してコミュニケーション  
がとれるので、得られる  
ものは極めて大きいです。

これまでの活動の基礎の上  
に、第五福竜丸事件の意義を  
を幅広い人々の間に伝えるた  
めに、役員一同工夫して仕  
事に当たります。皆様の変わ  
らぬご支援、ご鞭撻を切にお  
願い申し上げます。

名取弘文さんとの  
トーク

名取 このトークも回を重ねて、島田さんの言葉づかいや強調する点も微妙に変わってきていますね。

島田 やはりポイントは自分の故郷とは何かということですね。八五年のときのような大きな動きにならないかもしれないけれど、帰島は節目ですので、ぜひ立ち会いたいと思っています。

名取 福島県浪江町の仮設住宅に住んでいる方たちと連絡が取れて、福島でも開催しました。スライドのあと、話しているとだんだんつらい話になっていくんです。一時帰宅するとその度に気が滅入ってくる、今行ったら死んでしまうかもしれないと話される方がいるんですね。今まで人前でそういうことを言ったことはなかったのですが、島田さんのスライドを見ながら感じるものがあったんだと思います。

また会場で話しかけてきた女性が、「あなたたち東

京から来ておいしい店の場所がわからないだろうから案内してあげましょう」と言われ、連れて行っていただいて話をしたんです。すると、実は仮設住宅に来たものの、周りの方と馴染めなくて悩んでいるというんですよ。そういう話は周囲の人には言えないので、僕たちみたいにならなくていい状態も知りました。

島田 今回の展覧会のチラシに「人びとは一方的に核に負けていたのではない、子どもを育てヤシを植えた」という言葉を入れました。被害を受けてかわいそう、と見るのではなく、威厳をもって、誇りを持って、人権を取り戻そうと戦いつづけてきたこと知ってもらわないと、この展示は成り立たないと思っただけです。

名取 これは福島へのメッセージにもなっていますね。これからも多くの人に、伝えていきたいですね。

(名取さんは元小学校家庭科教員、「ナトセンのおもしろ学校」主宰)

島の人たちへの  
島田さんの想い  
『ふるさとは  
ポイズンの島』  
出版

島田興生さんが初めてマールシャルに渡ったのは一九七四年。水爆「ブラボー」から二〇年目のこと、来年は被ばく六〇年ですから実に長いマールシャルとの交流です。

初期の取材により七七年に出された『ビキニマーシャル人被曝者の証言』は、島の人たちの被ばくと困難を重

モノクロ写真と言葉で、「唯一の被爆国」に突きつけるものでした。

島田さんの口調は、もの静かですが少し怒っているような感じですよ。行動的です。八五年から六年間マールシャルに移住し、ロンゲラップの人たちの「島捨て」に立会い、彼らに移り住んだメジヤト島での不自由な暮らしに必要な船を贈ろうと、九六年には「ブンプンプロジェクト」(マールシャル語で船のこと)を呼びかけて「リイマンマン号」を贈り、メンテナンヌ要員も送り続けました。

ロンゲラップ本島の表土の除染がすすめられ、帰島が求められていくなかで、その抱える苦悩を知る島田さんは、

昨年二度の取材をおこない第五福竜丸展示館での企画展「マールシャルは、いま―故郷への道」を学芸員と一緒に制作してくださいました。



「福島とロンゲラップの女性性が二重写しになる」と語る島田さんは、スライド・トークを各地でつづけて、島の人びとのあゆみを伝える新著『ふるさとはポイズンの島―ビキニ被ばくとロンゲラップの人びと』をこのたび出版しました。最初の写真集の突きつけるような厳しい眼差しとは異なる、四〇年近く島の人たちの暮らしと子どもを育てる営みを見つめてきた島田さん。その記録をとおして、「島の人たちはけつして負けてきたのではない」という心優しいメッセージが伝わります。

ブンプンプロジェクト以来の仲間、渡辺幸重さんが的確な解説を付しています。



\*新著は旬報社刊、A5版74頁カラー、1500円+税。展示館でも扱います。



高校生に体験を語る大石さん

その漁師達もアメリカが補償してくれると思いい、実験に反対し署名にとりくみ、声を上げています。しかし、補償しないという事になり、自分たちが被ばくしたかもしれないという事になれば、差別と偏見が及ぶかもしれないと心配した。しかも内部被ばくの可能性があるにしても何十年も経ってから病気がでてくるなどわかりませんから、いま働けるのであれば、ということとで、みな口をつぐんでしまったのです。

私もたくさんさんの病気を抱えています。あちこちでビキニ事件の体験を話すことができるので、幸せだと思っております。事件の真相がわかります。

つれて誰かが言わなければいけないという気持ちになってきました。死んでいった仲間の方も訴えて、「被ばく」ということが本当に怖いことなんだと伝えたい。子どもを死産で亡くしたり肝臓ガンになりましたが、これは私だけの問題ではないと思ってきました。

### ビキニと福島

ビキニ事件により「内部被ばく」ということが問題視されるようになりました。福島事故に直面して、これまで言い続けてきたことが現実のものになってしまったと思いましたが、子どもたちの被ばくが心配です。

そもそも今回の事故の責任は誰がとるのでしょうか。この事件に関する責任は何なのかを突き詰めていかなければなりません。原発を導入しすすめた元の人たち。中曽根さんは当時アメリカの意向にそって原発導入の先頭に立ちます。私はそれが、いずれは核兵器を持つために役立つと考えていたように思えます。経済界では正力さんが宣伝役をかって出ますね。資源のない

日本が復興を成し遂げるために原子力エネルギーが必要だと。それを前面にだして覆いつくさないと原水爆反対の運動を叩き潰すことはできない、と考えていたように思います。国民のためなのか利権のためなのか、そういうことも明らかにしてほしいですね。

ビキニ水爆実験は、太平洋の真ん中でおこない、放射能は、魚などに濃縮されて人間の口に入りました。その経緯にみな驚きました。雨の放射能は日常生活を脅かしました。海流が次第に日本の方に流れてきたこともわかっていきます。

福島以後のこれから起こることにも心配です。海洋に大量の汚染水が流されました。魚が汚染されて、これからのつと広がるのではないかと。漁師さんたちは魚を捕ることができない。売れません。でも捕らないと魚の汚染が調べられないので捕りにいく。ほんとうに情けないと漁師さんが語っていました。その事をお聞きしながらか心配してあります。

### 来館者の感想文より

でかいっ！

- ・ なにかを見上げるとき、人は自分の大きさ小ささを実感して、おもわず声を上げるのかもしれない。(45歳 女)
- ・ 福竜丸がでかい。だから写真の中におさまらなかったです。すごい！！(16歳 男)

いやだ…

- ・ 核時代はもはや時代遅れなんじゃないだろうか(39歳 男)。
- ・ 私たちは真実に自分から近づかなければならないと思いました。
- ・ 放射能は日本にはいらぬです。(40歳 女)
- ・ 放射線で亡くなる人がいることに哀れを感じます。(17歳 男)
- ・ ほんとうにあったことなんだと、心にとめておきたいです。(12歳 女)

- ・ 先生から聞いていたより、もっとひどくてびっくりした。今日見たことはわすれないようにして、この事件が起きた日を忘れずに考えていきたい。(14歳 男)

おもしろかった

- ・ モールス信号があった。むずかしかったけどおもしろかった。(7歳 女)
- ・ ゴジラが置いてあったが、ゴジラの説明がなかった。
- ・ 知らないことは罪だと思いました。(23歳 女)

おとなたちへ

- ・ 核は絶対にいらぬと思った。使っているおとなたちは、自分の子どもにも核を引きつがせるだろうか。戦争のある未来をわすれつものだろうか。おとなたちはケンカするとか、ほうりよくは反対だとかいうが、話し合いで決められず、武力で解決しよう

としているおとなたちはどうなんだ。人にいうときには、そのことを自分がしっかりとできていなければいけないと思う。おとなたちは、むねをはって注意できるのか、核は絶対になくなくてほしい。(15歳 女)

- ・ 核実験で被害があったのに、お金で解決したということを知って、僕はとても悲しい気持ちになりました。放射能をあげて苦しんでいる人たちがいるのに、それが放射能のせいだと認められない人がいるからです。それは今も同じなのではないか。(15歳 男)
- ・ いまでも核兵器を持っている国があると、これから生きていくのが怖くなります。第五福竜丸のことを知ってしまったので、これから少しでも多くの人に知ってもらい、日本人なら当然知ってる！という世の中になりたいです。(15歳 女)

連載<sup>®</sup>晴れた日に  
雨の日に

—第五福竜丸とともに—

山村茂雄

け、会員の長谷川竜生・内田栄一・木島始の三氏が執筆することとなるのです。

\*

三氏は「各人がかかってきた仕事をしばらく停止し、二一、二日の二晩をついやし、原水協あつせんの一橋寮で第一稿を作成」——二三日早朝原稿は即日プリントになり会員の批評にさらされた。「批判の問題点は（自衛隊）の処理と（天皇）を突然想起させる場面であった」——「批判の嵐を浴びながらも内田栄一は批判者側に立っていた論客竹内実を一橋寮へ連行することに成功した。二五日早朝第二稿は完成。リハーサルは三日日からおこなわれた。——上演当日は、安保闘争の背景もあり観客の猛烈な拍手をあびて、しばしばソロのせりふが中絶されるぐらいであった」執筆担当U&Kの「共同制作強行記」が記している回想の抜粋です。

\*

作・記録芸術の会（執筆内田栄一・木島始・竹内実・長谷川竜生）、総指揮・千田是也、音楽・林光、装置美術・

安部真知、出演・新劇人会議一五〇名による、シユプレヒコール「武器のない世界へ」は八月九日、東京都体育館での第六回原水爆禁止世界大会宣言決議発表大会で上演されたのです。

\*

光りが おれたちを 灰にした／光りが おれたちを 蟹にした／あさひは そのとき 輝いていた

——被爆者と民衆、支配者たちの群舞が重なるなかで歌われる合唱曲「死者の歌」（作詞・木島始）を導入部にして劇は進行します。

1 秩序はどちらに、2 歴史はくりかえさない、3 戦争をまねきよせるな、4 無関心なひとびと、5 新しい出発の五場の構成劇シユプレヒコールには問答体の対話、群読、合唱が組み込まれています。自衛隊員の母たちの歌。

達者でいるかいねえおまえ／月々仕送りありがとう／おまえの立派な働きを／母はラジオで聞いてます／お国のため家のため／しっかりやって来ておくれ

「作曲者のいういわゆる島

倉千代子調のうた」は、容易に「東京だよおっかさん」「九段の母」？のメロデーに観衆をノックして、諧謔は転化し「うたと踊りが、予期指定したのと反して、反軍的積極的な意味に受け取られたこと」（制作強行記）などをふくみながらも、舞台は場面場面に強い印象をのこしました。

第四場の歌「みんなの指で字を書こう」は岩田宏作詞。ひかりとくもにころされたあのはちがつのひろしまをいつまでもおぼえていよう／みにさかながすむように／うみのさかながおよぐとき／こどもがおかをはしるとき／あめとはいとをふきとろう／しろいじょうぶなはんかち／で／しろいじょうぶなはんかち／に／みんなのゆびでじをかこう／このしまのそらをこわすな／けものにくさにひとにへいわを

\*

シユプレヒコール「武器のない世界へ」の結びは観客と合唱する全員合唱「新しい出発の歌」です。五八年の「最

後の武器」の終章でもうたわれたものです。安部公房作詞、作曲林光の行進曲風の歌。詩句は前号で紹介しました。

\*

台本の検討批判会が行われたのは、中央公論社の会議室（当時京橋）でした。進行は安部公房氏、佐々木基一氏の顔もありました。私も出席していました。千田さんの演出を助けていた観世栄夫さんとリハーサルが行われている俳優座近くの小学校までお話を伺いながら歩いたことなどを思い出します。

「記録芸術の会」は「記録の精神にもとづき、リアリズム芸術の革命と深化のために努力する創造団体」。安部公房、花田清輝、佐々木基一、岡本太郎、関根弘などが参加。一九五七年結成。六一年一月解散。シユプレヒコール「武器のない世界へ」の台本は「現代芸術」創刊号（編集長安部公房）60／10に「共同制作強行記」を併せて掲載されています。

（やまむら しげお／協会顧問）